

# 第1回美しい多摩川フォトコンテスト審査講評

- 日 時 平成21年1月20日
- 会 場 青梅信用金庫本店会議室
- 審査委員 委員長:佐藤 秀明(日本写真家協会会員)  
委 員:瀬戸 豊彦(風景写真家)  
委 員:榎戸 勝洋(多摩読売写真クラブ副会長)
- 応募作品 201点(80名)  
内訳 ○多摩川の風景・人々部門・・・170点  
○多摩川夢の桜街道 部門・・・ 31点

## (総評)

第1回目としては、レベルが高い。プロと見受けられる作品もあったが、一般の方が撮影したと思われる作品の中に見るべきものがあった。「多摩川夢の桜街道部門」は力不足。「多摩川の風景・人々部門」は色々な写真があり、今後さらにレベルアップが期待できる。

## (感想・意見)

- 「多摩川の風景・人々部門」には、優秀な作品が多数あった。
- 短期間でこれだけの写真が集まったことは、大変インパクトがある。
- 初回のレベルが高いと、次回はそれに引きずられてレベルが高くなる。
- 被写体が美しいと、撮影に工夫をしないため、被写体に負けてしまう。
- 色々な分野の写真(きれいな風景、ファミリー、夜景、夕焼け)があり、多摩川は、人に親しまれ、生活に密着して流れているという印象だ。
- 作品の中に、普段見かけている風景が多数あった。色々な人が色々な場所で撮っているという印象だ。
- モノクロ写真は内容的に弱かったが、ぼかしの技術を使えば良くなりそうなものもあった。
- きれいな風景の中に良い人が写っているのが、一番良い作品であると私は考えている。
- 秋の作品が入選しなかったのは、デジタルカメラによるありふれた作品が多かったからだ。

フィルムカメラによる良い印画紙を使った作品が無かった。

○回を重ね、色々なことを勉強していくと良い。

(反省・課題)

○中には玄人受けする作品もあった。そうした作品が多く入選すれば、それにつられて次からレベルが上がる。

○良いプリンターや顔料インクを使った作品と家庭用の汎用プリンターで印刷したものを、同じ土俵で比べるのはかわいそうだ。結果として優劣は出てしまうが、今後の課題である。

(検討・要望)

○今後、このフォトコンテストを発展させて行くためには、作品を展示する機会を多く企画してほしい。

○入賞の作品は、大きく伸ばせば迫力があるので、検討してほしい。

○「多摩川夢の桜街道部門」の方に力を注ぎ、3倍位の応募件数があれば、盛り上がる。

○「多摩川の風景・人々部門」を風景部門と人物部門に分けたほうが良いかもしれない。風景部門のスペシャル版として「桜」を考えたかどうか。

○秋の写真が少なかったなので、今後はもっとフォトコンテストの宣伝に力を入れていただきたい。

○新潟の雪国の子どもたちにカメラ100台を与えて写真を撮ってもらった。また、与論島の子どもたちにも、同じように撮影してもらった。企画が面白いとして、ある写真関係の企業がスポンサーになってくれ、交換写真会も実施した。「雪国の子供、南国の子供」ということで、話題になった。多摩川の上流域と下流域という方法でやってみてはどうか。

○美しい多摩川フォーラムの強みは、一企業だけではなく、いろいろな企業・団体や自治体が入っていることだ。JR東日本や京王電鉄など、重要な沿線の鉄道企業も支援している。写真関係の企業が加われば、さらに広がる。

○多摩川の流域には、いろいろな団体があり、フォトコンテストも多数実施している。

丹波山村などは年に8回位、立川にある百貨店で写真展を開催しているので、それらの団体と連携していけば、社会に影響力がある写真展ができるだろう。

以 上